
ラビッツ

蒼井かなん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラビッツ

【Nコード】

N9125C

【作者名】

蒼井かなん

【あらすじ】

うわぁぁん！！今日は進級試験の結果発表の日だよ。ああ…。自信はあるような、ないような……。ないような、あるような……。って、こんなところでうじうじ考えていてもしょうがないっ！よし、覚悟を決めて、見に行くぞっ！！元氣いっぱい टीーナ が決める、剣と魔法のファンタジーです♪

第一章 剣士な魔法使い？ 一話 花ぞ散りける

季節は春。

少しでも開けられた教室の窓からは、ひんやりとした風が吹き込んでいる。

「あう。さぶいつ」

思わずぶるぶるっと身震い。

うーん、春とは言っても、まだまだ暖かくはならないねえ。

窓の外は春真っ盛りなんだけど……。

ふと窓の外に目をやる。

校庭に埋められている木々には、桃色の花が満開に咲き誇っていて、風が吹いたりすると、花びらが風に誘われるように舞い散っている。

はああ。春ですなぁ。

思わずまったり。

花びらが舞い散るのって、すごくきれいでいいよね。

って！ 春に酔いしれてる場合じゃないじゃん！ おまけに今わたし「散る」って言葉使っちゃったし。

ああ。悪気はないんです。だから、どうかわたしを合格にしてくださいあい！！

あ……最初からテンション高くてごめんなさいです。

今日はわたしにとって、とっても大切な日だったので、つい。

そうそう、わたしの名前はティーナ・ベルロード。

モベルナ学園っていう、職業訓練学校に通う十五歳の女の子です。え？ 職業訓練学校って何って？

んとね、簡単に説明すると、将来自分になりたい職業に就くために勉強するところだよ。

って、これじゃあ簡単すぎるって？

あはは。ごめんなさい。

後でぼつぼつ説明してもいいんだけど、それも大変だから、簡単に一通り教えちゃいましょう。（いらないなんて言わないでね）

モベルナ学園は、この世界で最も広いジュリア大陸の中心部、三方を山に囲まれたミユリカって言う町の中にあります。

世界各地には、この学園のような職業訓練学校がたくさんあるんだけど、モベルナ学園ほど大きい学園は他にないんだって。

大きいって言うのは、学園の広さもそうなんだけど、ここで教えてもらえる職業の数の多さもある。

剣士、魔法、武道、ガンナー、魔獣使い、吟遊詩人、商人などなど、この世界で必要とされるほとんどの職業の勉強をすることができると。

しかも教えてくれる先生が、実績持ちっていう超一流ばかり。

中には、かつて光の戦士と呼ばれていた、昔この世界を救ったっていう人もいるって言うし。（わたしは会ったことはないし、どの人なのかも知らないけれど）

だからね、ここに通うために、わざわざ大金持って他の大陸から来る人もいるんだって。

もちろん修練中はここに滞在しなくちゃいけないから、遠くから来る人たちは学園内にある寮に入ることになるんだけど、かなりの人数がいるから、空きとかがなくて、入れない人もいるみたい。

幸い、わたしはすんなり入ることができたんだけどね。

この学園では、三月と八月に入学の手続きがあって、実際の授業は四月と九月から開催される。

授業の方は特別な理由がない限り、全員が一回生からはじめて、その職業の基本から教わるの。そして、半年間頑張ると進級試験が受けられ、その試験に合格すると、見事二回生に進むことができるんだ。

後はこれの繰り返し。あ、もちろん内容はどんどん難しくなっ

いくし、上級生になればなるほど、次の回生に上がるのも難しいんだって。

最終的には十回生まであるんだけど、そこまで行くとその職業の一流とも呼ばれるくらい、すごい腕前になるんだってさ。

でもねえ。十回生まで頑張る人、そんなにいないって言ってたなあ。

もちろん授業が厳しいからって言うのもあるんだけど、この学園に通うための学費とかもあるしね。

十回生ってことは、落第なくストレートに行っただとしても、五年間はここに通り続けなくちゃいけないでしょ？ お金とかすごいかかるんだよねえ。

まあお金持ちの子はいいだろうけど、普通の子は五年通い続けるなんて、到底無理。

それにね、途中で辞めてしまったとしても、その間習ってきたことが無駄になったりすることはないんだよ。

さっき、半年ごとに進級試験があるって言ったでしょ？ その試験に合格できると、『〇回生を合格しました』みたいな証明書を学園から発行してもらえて、それを各地にあるブレリックスセンター（職業案内場）に持って行くと、その証明書に見合った仕事を紹介してもらえるんだって。

そりゃ、一、二回生くらいでは大した仕事にはありつけないだろうけど、五、六回生まで行けば、結構いい仕事をもらえるみたいなんだ。

だから、せめてわたしもそれくらいまでは頑張らないとね！

って、ここまで一気に話しちゃったけど、着いて来てる？

わたしって説明とか下手くそだから、分からなかったらごめんね。ふう。

あれ？ 説明ってこんなもんだったかな……。なんか他にも色々あったような気はするけど。

うーん……。まっ、いつか。

とりあえずは話し進めちゃおう。
んで、何かあったらそのつど説明するね。

さてさて、先ほど説明にも出ました進級試験。

実は、つい先日わたしも受けてきたんだ。そして、今日がその試験の発表日だったりするわけ。

あ、そういえば、学園の説明してて、自分のことすっかり忘れてたよ。

名前と年齢はさっき言ったとおりで、わたしはこの学園では一回生の剣士クラスに通っているのです。

女の子で剣士クラスなんて珍しいでしょ？ クラスでも女の子、わたしの他に一人しかいないし。

父様が剣を扱ってたって聞いていて、それでなんとなくね。

それに、この学園に下見に来たとき、上級生の剣技を見せてもらったんだけど、もうすごいなのって。

口をぽかんと開けたまま、見入っちゃったもんね。

わたしもあんな風になれたらなあって。

まあ、一回生のわたしにはまだまだ遠い話だけどね。

一回生なんて、毎日素振りと基礎体力向上トレーニングで、最初の頃なんか、筋肉痛に悩まされたっけ。

他には、たまに試合の真似事みたいなのをやるくらいで、剣技なんていつになったらできるようになるやら。

って、できるようになるために進級試験を受けてるんじゃないねえ。

あゝあ。ちゃんと受かってるかなあ……。

正直なところ、かなり不安なの。

一回生が落ちる確立はわずか五パーセント。

これなら全然余裕じゃないの？ って思うでしょ？

でもね。実はわたし、一度落第してるんだよねえ……。

そうなんです。わたしってば、落ちる確率五パーセントに入っち

やった、落ちこぼれの生徒だったりするんだよね。

あはははあ。

って、笑ってる場合じゃないか。

一回生が落ちるなんて、とんでもなく恥ずかしいことなのに、また落ちちゃったりしたらしゃれにならない。

今度は退学させられちゃうかも。

ううっ。そうだったら、大人しくカムスの所に帰るしかないのかなあ。

あ、カムスって言うのは、わたしを育ててくれた人なんだ。

両親は小さい頃に病気で死んじゃって、ずっとわたしのことを娘のように可愛がってくれていたの。

バスっていう、ここから南の方にある、小さな山間の村に二人つきりで住んでいたんだけど、ある時、いろんなことを勉強し、その目で世界を見てきなさいって言われて、村を出ることになったんだ。

すっごい大金まで持たせてくれたんだよね。

まあ、そのお金は両親がわたしのためにつて残してくれたものらしいんだけどさ。

ただ、村を出るにも、外の世界なんて出たこともなかったから、カムスの紹介でとりあえずここに来ることになったの。

前々から剣を習ってみたいって話していたからね。

ダメだったら戻っておいでも言われたんだけど、本当にそうなのだったら嫌だなあ。

はああ。一年前に村を出て、一回生も習得できずに帰るなんて、カムスに合わせる顔がないよう。

って、これじゃあまるで、わたしが進級できないみたいじゃねえ。

まだ結果は分からないのに。

……。

ああっ！ やっぱり不安なものは不安だあっ！！

あのね。わたし、すつごく運動音痴なの。

小さい頃から、走ったりするの苦手だし、何にもないところで転んだりしてたし。

進級試験のときにやった試合なんか、三試合やって、三試合とも惨敗しちゃってるの。

同じクラスの生徒との試合だったんだけど、あつという間にやられちゃって……。

はああ。やっぱりこんなんじゃダメだよな。

筆記の方は自信あるんだけど。

そうなのです。

剣士クラスって、実技っていうイメージが強いけど、教養もちゃんとあるんだよ。

歴史上の人物とか、剣の種類、剣の構え方の名前だとかね。

前回この試験を受けたときは、全然覚えてなかったんだけど、さすがに二回目だからか、ばっちりだったの。

あと、進級試験にはもう一つあって、一般教養の試験。

これは職業に関わらず、全員が授業を受けてるんだけど、この世界におけるマナーだとか、賢い世界の渡り歩き方だの、この世界に生きる民にとって必要な知識に関することを教えてもらえるんだ。

こっちの方の試験も、しっかり勉強したからばっちり！

実技がダメでも、筆記ができていれば……。

なんとかそっちの方に望みを託して、少しでもいい方向に気分を持っていかなとね。

よしっ！ 説明も一通り終わったことだし、気分を変えて、結果を見に行こうっ！

進級試験の結果は、校庭の掲示板に貼られている。

外に出ると、結果を見に来ていた生徒達でこった返していた。

友達同士で抱き合う人。雄たけびを上げて喜ぶ巨人族の人。肩を

落として落胆している人。

本当に様々な人たちが溢れている。

お願いです。どうか、どうか、後者のようにはなりませんように……。

と、切なる願いを胸に、自分のクラスの掲示板を探す。

といってもね、担任の先生が場所を示した地図をボードに書いておいてくれたから、掲示板の場所はすぐに分かった。

それに、掲示板の前には同じクラスの人がいたしね。

一人の男の子がわたしに気づき、ニヤツと笑った。

「やあ、ティーナ。見なくてもいい結果を見に来たのかい？」

どこかの国の貴族のお坊ちゃまで、いつつわたしのことをからかってくる、ジャンティスだ。

すっごく嫌なやつだけど、成績はいつつもトップ。

「ほつといてよ」

彼と話をするときはいつつもこんな感じ。

ジャンティスと話をする、なぜか機嫌悪くなっちゃうんだよね。でも、そんなわたしの不機嫌な表情を見て、さらに一言。

「昔もんはさつさと田舎に帰れよな」

むかつ。

「ちよつと！ どういうことよっ！！」

「へっ。そんなん決まってるだろう。お前の格好、どう見たって昔もんじゃねえか」

「うぐっ！」

うつきいっ！

やっぱりこいつ、すっごく嫌なやつだっ！

実はわたしね、カムスに剣士の訓練するって言ったとき、何も言わずに着せてくれた服があって、それが今着ているこの服なんだ。

その服は、刀操士と呼ばれていた人たちが昔着ていたと言われていて、着物という服に、袴という物を履くスタイルなんだけど……

正直、今の時代にこんな格好で歩いている人なんかいない。

それは分かってる。分かってるけど……。せつかくカムスがわたしのために用意してくれたのに、こんな風に言われるなんて、すごく許せない。

なによ、なによっ！ 昔もんって言うけど、昔にこんな素敵な蝶の柄なんかあるわけないじゃないねえ。

そうなの。着物は白いんだけど、袖のところには、紫や赤を中心とした色使いで蝶が描かれていて、すごく可愛いんだから。

袴の方は紺色の無地なんだけど、そこが大人っぽくて魅力的。それに、昔の人は草履って言う靴を履いていたらしいけど、わたしは茶色いショートブーツだもん。

全然ちがうー！

まったく、本当に失礼しちゃうんだから。

頭に來たから、ジャンティスを無視して掲示板を見に行こうとする、

「おいっ。ティーナが來たから見せてやれよ」

と、ジャンティスがニヤニヤしながら言った。

掲示板を見ていた生徒は、わたしを見て一斉に道を開ける。

そして、近くにいた生徒同士でひそひそと話しては、わたしを見てニヤニヤ。

一体何なのよ。まったく感じ悪いんだから。

「ほらっ。開けさせてやったんだから、早く見ろよな」と、嫌味な言い方。

これはもちろんジャンティスね。

相手にするのも嫌だったから、無言でわたしは掲示板を見た。

掲示板には、合格者の名前がずらずらと書かれている。

皮肉なことに、一番上にはジャンティスの名前。

この掲示板、成績優秀者が最初に書かれてあるから、一位がジャンティスだったということ。

まったく、なんでこんな憎たらしいやつが一番なんだか。

と、ますます不機嫌になるわたしだったが、とりあえずは氣を取

り直して自分の名前を探す。

「えっと。ティーナ。ティーナ・ベルロードは……」

順々に見ていくが、わたしの名前は見つからない。

そして、ついに最後の一人の名前となり……。

「バルリーナ・ミュティス……」

……。

「う、うそ……」

わたしの名前、書かれてなかった……。

この瞬間、最も恐れていた、二度目の落第という現実を叩きつけられたのであった。

第一章：二話 最後のチャンス

「なっ。結果を見る必要なんてなかっただろ？」

普段のわたしなら、彼の口調に怒りがこみ上げてきて反撃するんだけど、二度目の落第という衝撃的事実を目の前に、そんな余裕なんかなかった。

「そうね……」

唇を噛み締め、俯きながらぼそつと言。今のわたしには、一言話すのも精一杯。

辛い結果に、悔しくて涙が溢れてくる。泣いちゃダメだって分かっているのに、自分ではどうすることもできない。

溢れた涙は頬を伝わり、ぽたり、ぽたりと流れ落ちる。

「……ティーナ？」

さすがのジャンティスも、わたしが泣いているのが分かったんだろう。周りもざわざわと動揺しているように聞こえる。

わたしはすぐさま後ろを振り返り、何も言わずにその場を離れようとした。

いつまでも、惨めな自分を曝け出さなかったしね。

「あつ。おい、ティーナ――！」

一歩足を踏み出したとき、ジャンティスがわたしの手を取った。

泣き顔は見られなくなかったから、顔は伏せ気味のまま振り向いた。

「なに？」

彼も気まづかったのか、わたしの顔を見ていないように感じた。

「あの……。ごめん……」

「！？」

ジャンティスらしくない言葉だった。

彼が謝ったことなんて、今までに一度もない。

「……諦めるなよな。お前らしくないからさ……」

「ありがとう……」

そう一言だけ言って、走ってその場を離れた。

正直、今までひどいことしか言われたことがなかったから、ジャンティスの言葉にはじーんと来るものがあった。でもね、素直には喜べないんだ。だって今のわたしには重すぎる言葉だったから。

その後わたしはどこへ向かうわけでもなく、ひたすら走り続けた。涙は止まることなく流れ続ける。

やがて走りつかれ、花びらの舞い散る木の下で足を止めた。

あゝあ。わたしも散っちゃったね……。

わたしってば、ほんとバカみたい。二回も試験受けて、二回目も落ちるなんて……。どうしようもないくらい、ダメな子だよ。

やっぱり剣の才能なんてないのかな、ジャンティスには諦めるなって言われたけど、一度カムスのところに帰ろっかなあ。きっと怒られるだろうな。

どれくらい木の下で立っていただろうか。ぼーっとしながら、いろいろなことを考えていた。

「おーい、ティーナー!!」

と、わたしの名前を呼ぶ声が聞こえてきた。

泣きはらした顔を上げ、声のした方を見ると、クラス担任のペレウス先生が駆け寄ってきた。

額には汗がびっしょり。もしかして、わたしのことを探していたのかな？

あ、ペレウス先生はもともこの生徒で、一度も落第することなく、ストレートで十回生を卒業したとっても優秀な先生なの。

卒業後は仕事依頼が殺到で、毎日が忙しかったんだって。時には大きな国の王様から、凶悪な魔物を倒してほしいとかっていう依頼もあったみたいだから。

でも数年前、学園長先生直々に新しい生徒の育成に力を貸してほ

しいって言われたんだって。

さすが学園長先生が目をつけるだけあって、授業はとても分かりやすいよ。たまに見せてくれる模擬試合ではもう呆然。動きとか早くて、全然着いていけないんだから。

先生つてば顔立ち良いし、背も高いし、スラリとしてるし……学園内でもフアンクラブができるほどカッコいい。

それなのにも関わらず、『なんで彼女ができないんだあ！』って嘆いてたっけ。

彼女、すぐにできそうなのになあ。先生の理想が高すぎるとかなのかな？

こんな風に考えられてるとも知らず、先生はわたしの前で足を止めると、息を切らしながら言った。

「まったく、探したんだぞ。もう結果を見たはずなのに教室にも戻ってこないし。校舎中探し回ったんだからな」

「えっ？ ……あっ！？」

そうだった。そういえば、結果を見たら教室に集合すること。って言われてたんだ。

でも、そのことを覚えていたとしても、たぶん教室には行つてないと思う。こんな落ち込んだ気分で教室になんかいけないもん。

「すいません……」

とりあえず、頭を下げて謝る。

集合って言われていたのに行かなかったのはわたしが悪いんだしね。

先生が深いため息をついた。

「はああ。まあ……仕方ないよな。教室に戻れない気持ちも分かる。合否については、先生たちもすぐ悩んだんだ。しかし、どうしても実技の方が点を付けられなくてな」

さもすまなそうに、頭を掻きながら話す。

「いえ、それは自分でも分かっているの」

一勝もしてないんだもん。点数が付けられないのは当たり前。ま

あ分かつてはいても、受かっていてほしいっていう気持ちの方が強かったから、こんなにも落ち込んでるんだろうけどね。

「筆記の方は、剣士クラス一回生唯一の満点者だったんだが……」
「はっ!？」

その言葉に、わたしは耳を疑った。

「えっ。わ、わたし、満点だったんですか!？」

わたしが驚いたように聞くと、先生はにっこりと頷いた。

「ああ。トップのジャンティスの筆記は、二百点満点中百八十六点だったが、ティーナは一問も落とさず満点だ」

「そ、そうなんだ。自分でも、筆記はちよつと自身あったんです。でも満点だなんて……」

なんか夢みたい。

わたし山育ちで、ちゃんとした学校はここがはじめてだったから、試験とか受けたことがあまりなかったのね。だから満点なんて今まで取ったことなかったし、すごくびっくりだよ。

「さすがにちゃんと勉強しただけのことはあるな。いや。勉強をしていたとしても、満点を取るなんて、簡単に出来ることじゃない。本当によくやったよ。後はやっぱり実戦だな。ティーナは普通の授業ではちゃんと動いている。だが、いざ試合になつてしまうと、緊張して体が全然着いてきてないんだ。たぶん、怖いという気持ちがあるところにあるんじゃないかな? そういう気持ちがあると、動こうと思っても思うように動いてはくれないからな」

さすが先生だよな。わたしの気持ち、ちゃんと分かってるんだ。

試合のときって、他の人に見られてるっていう緊張感と、失敗したらどうしようっていう怖さがあって、開始の合図が出されてもなかなか動けないの。んで、相手にはそれがばっちり見抜かれちゃつて、隙を突かれ、はい、おしまい。

我ながらあっぱれなやらかただったなあ。

しかもね、それが三回も続けてなわけだから、そりゃもうどうしようもないです。

「せんせえ。やっぱり筆記だけじゃ合格にはならないんですか？」

「ああ。剣士は実戦が第一だからな。筆記はおまけみたいなものだし、実技がちゃんと身についていないと、二回生に上がったときに怪我をしかねない。ティーナの場合、二回目の試験なのにも関わらず一試合も勝てなかっただろう？　せめて一試合でも勝っていてくれれば救いようはあったんだが」

「はう。そうですね……。やっぱりわたし剣士には向いてないんだ」

「そんなことはないさ！　どんなにダメな子だって、頑張れば少しずつ上達するんだ。だけど、諦めてしまったらそこで終わりなんだぞ！？」

諦めたら終わり……。

そうなんだよね。ここでわたしが諦めてカムのところに帰ってしまったら、もう剣を握るなんてないと思う。

一度落ちた時だって、悩んで続けようって決めたんだ。

これで辞めちゃったら、わたしの一年が全て無駄になって終わっちゃう。そんなのやっぱり嫌だ！

後悔は絶対にしたくない。だから……。

「先生……わたし、やれるだけやります。もう一度、一回生で頑張ります。せつかく入ったのに、なにも自分の物にしないままのこの帰るなんて嫌です」

「そ、そうか！！　いや、ティーナなら絶対にそういつてくれると思っていたよ。君は頑張る子だ。だから絶対に諦めたりはしないってね。君のやる気が聞けて本当に良かった！」

そう言って、軽くウィンクした。

あゝあ。これがわたしだったからよかったものの、先生のこと好きな生徒だったら、きつと卒倒しちゃうね。

ふう。頑張るって決めたせいかな？　なんとなく落ち着きを取り戻せた気がする。

「よし、これでようやく次の話に進められるよ」

そう言って、小脇に抱えていた鞆を開け、中をぐそぐそと探っている。

「次の話ってなんですか？」

「あつた！ ん？ ああ、今話すけど……うおっほん。これ、読んでみたくないか？」

わざとらしく咳払いをした後、鞆から取り出した小さなカードをわたしに差し出した。

なんだろう……。

渡された方の面には何も書かれてはおらず、反対にしてみる。

……えっ！？

書いてある言葉に、わたしはとてもびっくりした。

「と、特別者、追試験開始のお知らせ！？」

こ、これって……。

わたしは目を見開き、先生の顔を見た。

「うん。追試、受けてみないか？ もちろんこの試験に合格することができれば、通常通り二回生に進級することができるんだ」

「二回生に……」

とても信じられないような話だった。

「嫌か？」

困ったような顔でわたしを覗き込む先生。

「いえっ！ そんなことないです！！ ただ、突然のことだったから、頭が付いてきてなくて。前はこんなお話もなかったし……」

「ああ。この追試は、落第した生徒全員が受けられるわけじゃないんだ。今回ティーナは筆記の方は満点だった。そこを考慮しないのは僕としても忍びなく思っていてね。それで学園長先生に、ティーナの特別追試験の申し出をしてみたんだよ。そうしたら、ティーナにやる気があるのであれば……ということになってね」

そっか、それで先生は最初にこの試験のことは言わなかったんだ。わたしに本当にやる気があるかどうかを確かめるために……。
「どうする？ この試験、受けてみるか？」

わたしの答えはもう決まっていた。

背筋をびしつと正し、きりつとした表情ではっきり「はいっ!!」と返事した。

先生にもらったチャンスだもん。絶対無駄になんかできないよね。「よしっ!!」それじゃあさらに話を進めるぞ。いいか、二回生に上げれる最後のチャンスだからな。心して聞くんだぞ!」

わたしの両肩にぼんと手を置き、真剣な眼差しでわたしを見た。

「はいっ!!」でも、その試験って難しいんですか?」

「うーん、そうだなあ。この試験に、実力は一切関係ない。全ては運次第かな。まあ、軽くだけでも説明しよう」

「はい……」

心なしか、返事に元気がない。

だって、実力が関係なくて運次第って、一体どういう内容なんだろうって思っちゃって。

大変そうなやつとか、怪我するようなやつなら嫌だなあ。

徐々に不安が広がっていく中、先生は話を進めていく。

「追試は明後日。この学園を全て使って行っ」

「えっ? 学園のすべて?」

うげっ。一体どんな内容だよ。この学園の広さって尋常じゃないんだよ? はじめてきた人なんか、絶対に迷子になっちゃうんだから。

いや、一年通ってるわたしだっただけに迷ったりするんだし。

何をするのか不安で、先生の次の一言が怖いよっ。

「ああ。簡単に言っちゃうと、かくれんぼをするんだ」

これを聞き、頭の中では小さな子が十秒数えて友達を探しに行く……という定番の遊びがすぐさま思い浮かんだ。

へえ……かくれんぼねえ……。

「懐かしいですねえ。って!!」かくれんぼってなんですか!?!? もっ、からかわないで真面目に話してくださいよ」

「えっ? からかってなんかいないよ。あ? もしかしてティーナ

はかくれんぼ知らないのかい？ 小さい頃やらなかったかなあ。鬼が隠れた友達を探しに行く遊び」

「そ、それぐらい知ってますって！！ わたしが言いたいのはそうじゃなくて……」

「あははっ。ごめん、ごめん。分かってる」

そう言つと、さらに鞆の中をこそこそ。そして、一枚の用紙を取り出した。

「んもう。先生つてば意地悪なんだから」

「はい。これに追試の説明が書いてあるから。言つとくが、かくれんぼは真面目な話で、別にからかつてるわけじゃないんだぞ」

半信半疑な顔で差し出された紙を取り、その紙に目をやった。そして、わたしの目にでかでかとした文字で書かれていた文字……。

『一〇四回生、追試者かくれんぼ試験のお知らせ』

はう！！？

なんかもういいや……。追試がかくれんぼでも、もうなにも突っ込まないよ。

とりあえずは読み終わってからいろいろ考えようつと。えつと……

『この試験は、一〇四回生の進級試験の落第者、三十二名を対象とします』

へえ。わたしの他にも三十一人も落ちてたんだね。

そう思うとちよつと気分が楽になる。って、低レベルな話だけど。おつと、続き続き。

『制限時間は一時間。この学園のどこかに隠れた、生徒や教師百名の中から、五名を見つけることが出来たら追試合格となります。又、見つけた生徒や教師は共に同行し、他の生徒を見つける手伝いをし

てもらふ事が出来ます。尚、隠れた生徒は、一回生、六回生の成績優秀な者ばかりを集めております。それでは、追試合格を目指して頑張ってください」

つて!!　これだけ!?

後ろを見てみても、何も書かれていない。

「先生、これ説明になってないですよ」

紙をひらひらとさせ、不満いっばいで先生に嘆いた。

「あはは。まあ、それ以上書きようがなかったんだろっなあ」

「それにしても少なすぎですよ。つて、これ、剣とか全く関係ないんですけど、いいんですか?」

「そこらへんは学園長に言ってくれ。学園長先生が提案してきたんだし。まあ、一、四回生の追試生全員でやるからなあ。時間もそんなに使えないし、まとめて簡単にできるからだろうな。上級生にもなれば、試合で勝った方のみが進級できるっていう追試をやってるが、ティーナはそっちの方がよかったかい?」

その台詞には、思いつきり首を横に振った。

試合で勝った方が進級なんて言ったら、絶対にわたし受かれないの目に見えてるもん。

「まだかくれんぼのほうが受かる確率が……」

「あははっ。そうだな。だが、この試験もかなり難しいと思うぞ。

学園は広いからな。隠れる生徒の中には、忍びを心得ている者もいるし、油断していると一人も見つけられないかもしれないぞ」

ビシッと先生に言われ、ちょっと反省。

いくらかくれんぼとはいえ、これは遊びのかくれんぼじゃないんだもんね。

この学園の広さつて尋常じゃないし……。

「あれ?　この試験つて、寮とかも隠れてたりするんですか?」

「あ、いや。さすがに寮内はなしだ。男子寮に女生徒は入れないし、女子寮に男子生徒は入れないからな」

ほつ。よかったあ。広さで思い出したけど、この学園って、寮だけで四つあるの。

男女共に二つずつあって、一つの寮に大体三百人くらいが生活できるようになってる。

こんなところに隠れられたら、探すの大変。

「そうだ。明日になれば、詳しい内容の書いた物を渡せると思う。」

そっちには隠られる場所やら、集合時間、集合場所なんかも記載してあると思うから、それを読んだほうがいいだろう」

「そんなのあるんですか？」

「さつき確認したら、まだ製作途中だったんだ。だからこんな内容の薄い文章のしかなくてな」

なあんだ、そういうことだったんだ。

まあ、いくら低回生の追試だからって、あまりに簡単にまとめられちゃうと、なんか悲しいしね。

「じゃあ、明日取りに行きますね」

「ああ。明日は第四実戦室にいるから」

「わかりました」

かくれんぼかあ。幼い時に近くの村の子とよく遊んだっけ。

でも今回はわたしの二回生進級がかかった、大事な追試試験。真剣に頑張っちゃうんだから！！

なんて、一人で盛り上がっていたら。

「おやつ！？ もうこんな時間じゃないか！！」

と、学園にある時計を見て、なにやらそわそわしている。

「急にどうしたんですか？」

「ああ。あと五分後に、追試試験の打ち合わせがあるんだ」

時計を見ると、現在時刻は二時五十五分。

「えっ！？ じゃあ早く行かないとダメじゃないですか！！ って、

わたしのせいなんですよね、すいません」

「いや、いいんだ。ティーナの前向きな気持ちも聞けたし。ティーナが諦めるとか言ったら、先生落ち込んで打ち合わせ所じゃないか

らな」

本当に生徒のことを考えてくれている先生だよね。

こんなにも考えてもらってるんだから、それに応えるために頑張らないと!!」

「それじゃあ、明日。忘れずに取りにこいよ」

「はい、ありがとうございます」

そう言ってわたしはお辞儀をした。

「頑張れよ!!」

先生に励まされ、気合十分。

ようし、絶対に追試に合格して、二回生になるんだから!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9125c/>

ラビッツ

2010年10月28日04時05分発行